

### ルワンダ

#### 女性のための洋裁技術指導

##### 新学期の訓練生 & 終了試験

5月から新しい訓練生 21 名が訓練を開始しました。コーディネーターのブランディーンによると、新しい訓練生は覚えが早く、訓練をドンドン消化しており、予定通り 6 ヶ月で修了出来るだろうということです。また、遅刻や欠席も少なく、今までのグループよりずっと良い、ということです。今回は 21 名中 16 名が ARTCF 非会員です。受講料の支払いについても、2 名以外は払ったということで、新しい訓練のシステム（向上心の強い非会員を受入れ、また、受講料を徴収してやる気を出させる）が定着してきたように思われます。唯一の問題は、覚えや作業がとても早く、他の訓練生より早く課題を終了して、他の訓練生が追いつくのを待たずに、次の課題に進みたがる訓練生がいることです。

6月6、7、8日に、修了試験を行いました。ARCが2000年に訓練活動を始めてからの修了生36名全員を対象にしましたが、修了してから時間が随分たっている修了生もあり、全員が参加することが出来ませんでした。25名が参加し、うち不合格者（50パーセント以下）は5名です。現在、試験を受けなかった修了生が全員試験を受けるのを



待って、その後、不合格者については補習を実施、後に修了証書を渡す予定です。これにより、訓練生の励みになり、また、雇用を探せる可能性も出

て来ると思われます。

試験の内容は、理論の筆記試験の後、実技試験で半ズボンを作成することです。半ズボンは、ボタン付け、ファスナー付け、などの技術も含む為、実技試験に選ばれました。各自、採寸から始め、生地を型を描き、裁断、縫製、と進みます。トレーナーがそれぞれの過程で採点して回りました。

試験の結果		
番号	氏名	成績
1	CISHAHAYO Elloyda	84
2	MUKASHEMA Hassina	82.5
3	MUKASANO Felicie	80
4	NZARORA Zawadi	78
5	UWAMARIYA Florence	75
6	KAMONDO Jacqueline	75
7	NIYONSABA Ariane	74.5
8	UWINGORORE Christine	74
9	NYIRANSENGIYUMVA M.Alice	74
10	UWAMAHORO M.Jeanne	73
11	AKIMANA Elina	72
12	INGABIRE Angelique	67
13	NIYONSABA Chantal	65
14	NYIRASAFARI Jeanine	59
15	MUKANDOLI Rehema	58
16	UWIZEYIMANA Tuliya	55
17	MUKARABA Peruth	54
18	MUSABYIMANA Vestine	53
19	MUREKATET Consolee	53
20	NIYITEGEKA Julienne	50
21	MUTUNGIREHE Marie	48
22	NYIRABAZUNGU Emmerence	48
23	KAYITESI Gerardine	48
24	MUSENGIMANA Zelda	43
25	MUSABYIMANA Salama	23

##### 訓練所の売り上げ～自立的経営に向けて

訓練所売り上げの向上についてご報告します。注文代金先払いのシステムによって大きな注文を受けることが出来ました。また、自分自身アトリエを経営していた新しいテーラーの影響で、訓練所のやる気は今までより（初めて？）盛り上がっています。（報告：高美穂ルワンダ駐在代表）

## コンゴ民主共和国

### ニラゴンゴ火山被災者支援 - 被災者に毛布を 5000 枚配布！最終報告

2003 年 6 月、ついに「アフリカへ毛布を送る運動」からあずかった 5000 枚の毛布の配布を完了いたしました！配布時の様子をご報告いたします。

《6 月 16 日》

この日ゴマでの毛布配布のため朝 6 時 30 分に Jesus Alive Ministries (JAM) 現地代表がルワンダの首都、キガリにある ARC 事務所まで迎えに来てくれ、それからギセニへと向かいました。ギセニはコンゴ民主共和国と国境沿いの町で、そこからゴマへは車で 30 分ほどの距離にあるのです。4 時間ほどでたどりつき、キブ湖を眺めることのできる REGINA HOTEL に宿泊する事にしました。この日毛布配布ができてできなくても、夜を越すのはルワンダ国内の方が安全だからです。もちろんすぐにも毛布配布を始めたいところだったのですが、毛布とボランティアたちを乗せたトラックがまだ到着していなかったのです。5000 枚の毛布を運ぶのは、道の悪さやここがアフリカということを考慮すれば、そうたやすいことではないのです。それらが到着次第ゴマに出発する予定でした。しかし、暗くなってからでは国境を越えることはできないし、トラックも結局姿を見せることは無かったので、この日は結局ゴマに出発することはできませんでした。5000 枚の毛布をルワンダからコンゴ民主共和国に運ぶための書類手続きを完璧にしてあったにもかかわらず予定通りに行かないのがアフリカようです。非課税で毛布をルワンダに入れたのにも関わらず、それをコンゴで配るとするのはルワンダ政府としては納得がいかないのでしょうか。とにかく翌日無事に大切な毛布を乗せたトラックが到着するのを祈るばかりでした。

《6 月 17 日》

前日の話では朝トラックが着くはずでしたが、その姿はどこにもありませんでした。いつゴマにいけるかは誰も分かりませんでした。しかし午後過ぎにようやくトラックは到着し、国境を越えゴマへ向かうこととなりましたが、国境越えは時間を要するため、ゴマの毛布配布現場の準備が整い次第、誰かが私を迎えに来るといったこととなったのです。日が暮れ始めていました。私の不安が募る中、ようやくモーターバイクに乗って、JAM のボランティアが私を迎

えに来てくれたのです。バイクで急いで毛布配布現場に向かったのです。でこぼこ道を進むにつれて貧困化が激しく、衛生状態もかなり悪くなっているように思えました。遠くにそびえる山々には霧がかかり、標高の高いこの地はとてもひんやりとしていました。美しく雄大な自然ではありますが、それらから住民たちの厳しい生活状況を想像することができました。ゴマに近づくにつれて去年の噴火時の溶岩が道路の脇で確認できます。去年の緊急援助時に毛布配布を行った同じ教会を配布場所と設定していましたが、去年とは違い緊急避難民のためのテントや教会の外や中で避難生活をしている人たちはもはやいませんでした。

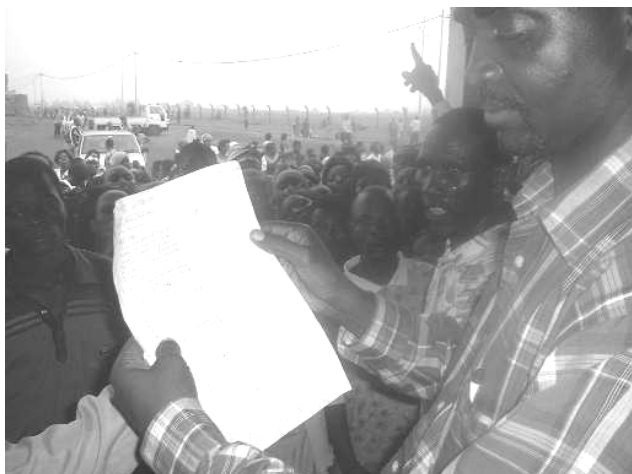
教会に入ると、整列してはいるものの教会いっばいの被災者とボランティアたち、またその熱気と



人々の話し声で、締め切られた教会は今にもパンクしそうでした。電気は通っていないため真っ暗でしたがたくさんの方が私を凝視しているのを感じ取ることができました。扉を締め切っているのは、日本から届けて頂いた大切な毛布が強奪されないようにするためです。

JAM の代表や現地ボランティアたち、さらに教会の主教が前に並び開会を宣言し、教会全体で感謝のお祈りを行いました。その後は、リスト通り穩便に毛布を配布するため一度難民達を教会の外に出し、名前を呼ばれた人から 1 人ずつ毛布を教会内に取りに行くという手順でした。このリストというのは、

JAM のソーシャルワーカーが毛布配布に先立って数日前にゴマに入り、誰が火山噴火によって家を失い、難民となったかを確認し作られたものです。強奪や混乱を避けるために入り口も一箇所、出口も一



箇所を設定していましたが、配布を行うボランティアたちも自分たちの役割を把握し、配布は順調に行われていました。名前を呼ばれた人は後方の扉から入り、教会の真ん中を進み、毛布の積まれたところまで行くと日本製の暖かい毛布を受け取ることができます。リストに載ることのできた人々は自分の名前が呼ばれるのを聞き落とさぬよう、必死でボランティアたちの声に耳を傾けていました。組織的な配布の様子をみて、私も落ち着いてこの現場をデジタルカメラとビデオで記録していくことができました。しかし、ビデオを片手にあちこち撮影していると、突如出口のはずの扉が勢いよく開き、たくさんの人々が毛布を目掛けて流入してきたのです。思わずビデオを撮りながら、「NO!NO!」と叫んでしまいました。必死で毛布を奪おうとする人々と、必死で毛布を守ろうとするボランティアたちで辺りは一時騒然となりました。もはや毛布配布どころではなく、この騒動を治めるためにボランティアたちは椅子を持ち上げて威圧したり、口論をしたりするはめになってしまったのです。たくさんの人たちが勢いよく教会内に押入ったために、脱ぎ捨てられた靴やビーチサンダルがあちこちに散乱していました。私は少し残念に思いましたが、これが現実でもあります。この日はもう夕暮れ時だったことと、この混乱で本格的な毛布配布は翌日からということになりました。私はこの日ゴマを去らなければならなかったのですが、後の報告によれば、翌日からの配布はどうやら順調にいったようです。

\*\*\*\*\*

外に出てみると、毛布を受け取る事のできた人た

ちが、嬉しそうにそれを抱え、「ありがとう」と感謝の気持ちを言っていました。強奪した、と言っても、彼らは悪びれる様子もなく本当に嬉しそうな顔で、毛布を手に入れることができた人たちと喜びを分かち合っていました。でも私はこれらの行為を非常識だと感じます。ただ唯一彼らの行為が教えてくれることは、「心の」貧困問題です。劣悪な環境の中、人間らしい生活が営めないことの意味の大きさを知ることができるのかもしれませんが。

正直、火山被災者難民だけでなく、ここに来るまでに見た貧しい人々すべてに暖かい毛布が必要なのではないだろうかと感じています。気候的な寒さと貧しさ、自然災害、たくさんの困難の中で生きる人々が、日本から送って頂いた毛布で少しでも暖かい夜が過ごせることを願います。それと同時に、彼らにも、何千枚もの毛布がなぜ、どうやってわざわざ送られてきているのかの意味を理解し、送ってくれた人々への感謝の気持ちを心に抱いてもらいたいです。



どれだけ多くの人々が、どれだけ努力をして毛布をここまで運んでくれたのかを想像してほしいのです。「Peace」「Love」、毛布に縫い付けられた一つ一つのメッセージ、少しでもゴマの人たちの心に届いていることを願います。

私が今思う事・・・それは人々の思いが結ぶ人間の輪です。遠く日本から何千枚もの毛布が船に乗せられ数ヶ月を要してやっとアフリカ大陸に辿り着き、それから内陸国であるルワンダ、そしてコンゴ民主共和国、ゴマまで運ばれてきたのです。誰もが知っていますが、ゴマと日本はとってもとっても遠いのです。その距離を乗り越えられたのは、一人一人の思いが少しずつ繋がって途切れることなく確かな輪を作ったからなのではないでしょうか。私はそう考え、その輪をなしたすべての人々に感謝すると共に尊敬の意を表します。たくさんの人々の暖かい思い

